
灰色の羽とバカな僕

ヨネ@ハイテンション

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色の羽とバカな僕

【Nコード】

N2946E

【作者名】

ヨネ@ハイテンション

【あらすじ】

どこだかわからない場所。誰だかわからない僕。どこかに向かう僕。どこに行くのかわからない僕。アーシェ、ブルーシェ。だから僕はバカなのだ。

遠く、遠く、どこまでも、飛んで行きたい。
行く場所がどこかなんて事は後で考えよう。
疲れて果てて、へたり込んだ場所が目的地。

そこが例え心安らぐ場所で無いとしても。むしろ僕の心をかき乱す場所だとしても。

まあそんな事は本当はどうでもいいことで。
なぜなら僕は何も考えてなんていないからだ。

広げた羽をたたむと、僕は地面に腰掛ける。
地面、土の感覚、土の匂い。

そして、現れる見知らぬ男の姿。

黒い羽を撒き散らし、その男は僕の横へと舞い降りた。

「お前ダレだよ？」

男は慇懃無礼に僕に言葉をかける。

「名前を聞く時は、まず自分からだろう？」

「ああん？ 俺の名前を知りたいのかよ？」

「知りたい知りたくないじゃなくて、礼儀だって言ってるんだよ」

「俺はアルシェリ」

「ふうん、変な名前だな。でもまあ名乗ったなら僕も名乗らないとな。僕の名前はブルシエント」

「お前のほうが変な名前だろ。しかも覚えにくいときてる」

「余計なお世話だよ。ところでここがどこだかわかるかい？」

僕は僕の身体を取り巻く世界を見る。

「ここがどこだって？ ここがどこかなんてわかる必要があるのかい？ 無いだろ？ ならどこだって変わりはしねえよ」

必要不必要によって、場所の意味が変化する。

確かにそれはそうかもしれないと、僕は納得して見せた。

どこだとしてもここは空の下であることには違いが無い。
ならそれだけで充分ではないだろうか。

「それで、お前はどこに向かってるんだよ？　ちなみの俺は世界の果てまで飛んでいくつもりなんだぜ。どうだ？　凄いだろう？」

アルシェリは背中の黒い羽を大きく羽ばたかせて、僕に自慢げに見せた。

「世界に果てなんか無いよ。あるのは君自身の限界だけさ」

僕は自分の背中の羽を一枚ちぎって風に飛ばした。

羽は上昇気流に乗って、どこまでもどこまでも舞い上がり、いつしか見えなくなって消えた。

「なら大丈夫だ。都合のいい事に俺には限界なんてないときている」

「ふうん。それは自分の力を知らない、哀れな男って意味だね」

「お前バカだろ？　自分の力を知らないから、限界が無いってんだぜ」

「上手い言い回しをするね」

「おうよ。俺は賢いからな」

「今日は賢い男とは話したくない日なんだ」

「なるほど。それじゃ日を改めてお前と話す事にするよ。あ、ブルシェ……なんだっけ？」

「何でもいいよ、好きに呼べばいい」

「お言葉に甘えて、俺はお前の事をブーシェって呼ぶ。お前は俺の事をアーシェって呼べ。これ決定な」

「アーシェ」

素直に呼んでみる自分が可愛いと思った。

「ふむ、なかなか照れるもんだな。ブーシェ」

「照れるな、確かに」

初めて会った男二人が、いきなり愛称で呼び合う姿は、正直気持ち悪いと思った。

「おっと、空が変わる時間だ。もうすぐ空が消えてしまう。消える前にもうひとつ飛びするとするか。じゃあな。もしかすれば、また

会うことがあるかもしれないだろう」

「いいや、きつともう会う事はないよ」

「そうか。そうだよな。確かにそうだよな。じゃ、最後にもう一回呼び合おうぜ」

僕らは意味も無く、2メートルほど距離をとった。

「ブーシェ」

「アーシェ」

そしてお互いに呼び合う。

「もしかすると、俺とお前は兄弟なのかもしれないな。そして兄弟だとすれば、きっと俺はお兄さんに違いない」

「兄でもなければ兄弟でもないよ。僕らは他人さ。ずっと他人さ」

「そうだな。まあそうなんだろうな。なんだか親しく呼び合うだけで、親友だか兄弟だかと錯覚しちまうんだな」

「言葉の魔法みたいなもんだね」

「じゃ俺は魔法にかかってみるよ。俺はお前を弟と试试看。じゃあな、弟。どこかの空で俺はお前の事を思い出すかもしれない」

アーシェは黒い翼を羽ばたかせ、1メートルほど宙に浮いた。

「さようなら、アーシェ」

僕は左手を高々と上げると、力いっぱい指を広げて手を振った。

アーシェは段々と空高く舞い上がる。

米粒ほどの大きさになったとき、空の上から悲鳴が聞こえた。

その悲鳴が最初とても小さかったのだけれど、だんだん、だんだんと大きくなっていく。

その声はアーシェの姿そのもので、僕の目の前にバタリと落ちた。アーシェの身体は見るも無残に、数本の槍で貫かれていた。

何があったのかはわからないし、わかりたくも無い。

わかりたくなくてもわかってしまうのは、目の前で少し前までアーシェと呼んでいた男が死んでいると言う事だ。

アーシェは、アーシェの、世界の果てまでいけたのだろうか。

僕の足元で惨めに横たわる、アーシェ。

僕の足元がアーシェにとっての世界の果てだ。

僕はアーシェの黒い翼から、一際立派な羽を一つ拝借すると、アーシェの血をインク代わりに、それを羽ペンにして地面にこう書いた。

『アーシェの世界の果て』

これでよし。

さて、僕は僕の求める場所に行かなくてはいけない。

それはどこかわからないし、わかりたくなど無い。

気がつく和白かった僕の羽と、アーシェの黒い羽が混ざり合い、僕の羽は薄汚い灰色になってしまっていた。

「まあいいさ。羽が綺麗なことと、僕の求める場所との関連性はないのだから」

もしかすれば、アーシェが僕の身体に魂としてへばりついて、ついでにこうとしているのかもしれない。

もう一生会う事の無い存在だったはずが、これから一生ずっと過ごす事になるうとは。

まあいいか。

それもどうせたいした問題ではないのだから。

僕は灰色の羽で大空に舞い上がる。

空は西からだんだん消えてしまおうとしていた。空がなくなればそこには、海が生まれる。海が無くなればそこには星が生まれる。

僕の羽は海を上手く飛ぶようには出来ていないので、空を飛んでいきたいのだ。

もしかすれば、この灰色の羽は海を飛ぶことも出来るのかもしれないのだけれど。

「さようなら、アーシェの世界の果て」

「こんにちは、僕の灰色の羽」

アーシェの世界の果てに別れを告げ、灰色の羽に始めましてと告げる。

舞い上がる僕の身体。

幾分かここにくるまでより身体が軽く感じる。

灰色の羽も悪くないものだ。

高く高くどこまでもどこまでも舞い上がる。

僕は空のてっぺんで目を閉じた。

そしてぐるぐると回った。

目が開いたところが進むべき方向だ。

今まで来た道に戻ったところがかまうもんか。

進むのも戻るのも、大差無いのだから。

開いた目の先に、大きなクジラが見えた。

ああ、もうすぐ海の時間がやってくる。

よし、あのクジラが僕の求める場所だ。

今そう決めた。

そして、そこにたどり着いたら。僕の灰色の羽の中で一番大きくて立派な物を一つとり、僕の血でクジラの背中にこう書こう。

『僕の場合』

「ばーか、ブーシェ。それはバカのすることだ」

灰色の羽が僕に呟いた。

「うるさいなあ。今日は賢い人とは話さない日だって言っただろ」

灰色の羽は寂しそうにバツバツサと音を立てた。

ともかくクジラに向かって飛ぼう。

「ばーか、ばーか、ばーか、ばーか」

馬鹿でいいのだと僕は思うので、放っておく事にした。

いつになったらたどり着くのか、僕の場所。

いつでもここは僕の場所。

クジラは潮を吹いて、ニヤリと笑って歌を歌う。

僕も一緒に歌を歌う。

翼も一緒に歌いだす。

ああ、ほら、なんだか愉快だし。

空は綺麗だ。

「ばーか、ばーか」
そして僕はバカだ。

おしまい☆

(後書き)

何も考えないで、適当に文字を打ってみました。

なんとなく小説っぽいような気がしないでもないので、ためしに投稿してみましたのです。

30分くらいでかいたかなあ・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2946e/>

灰色の羽とバカな僕

2010年10月8日15時36分発行